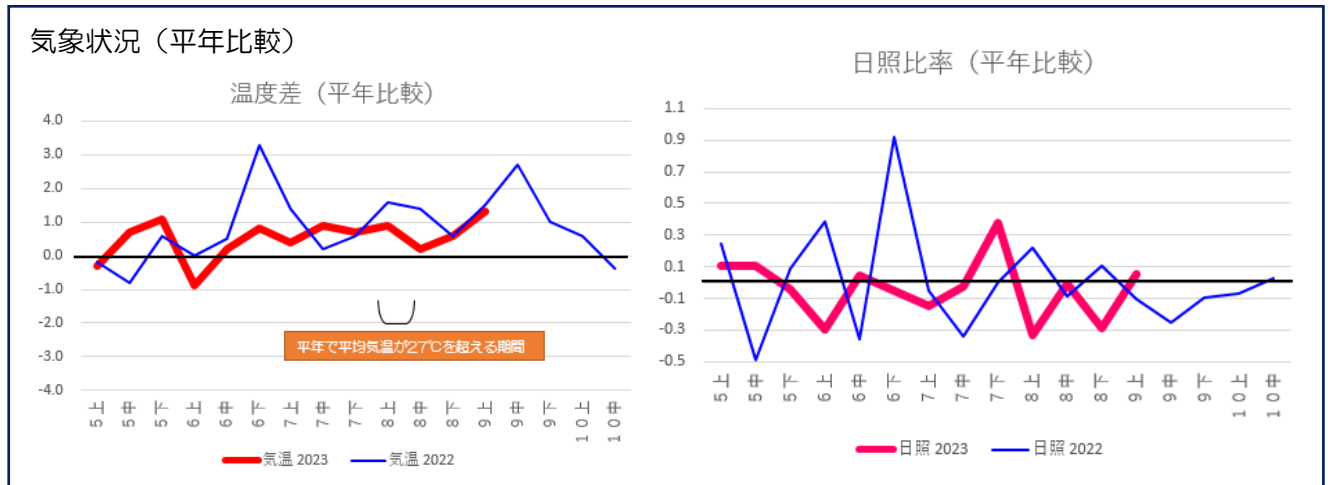


ひめの凜栽培技術情報

1 気象情報について



コメント

気温は、平年より8月下旬は0.6℃高く、9月上旬は1.3℃高く推移している。
日照は、平年より8月下旬は3割少なく、9月上旬は1割程度多く推移している。
※気温は平年より高く、日照がやや少ない状況であるので注意が必要。

2 栽培管理について

生育状況

○5月中・下旬田植は、平年並の生育であるが、出穂はやや遅れる傾向がみられた。
○6月上旬田植は、8月下旬には出穂を迎え、生育も平年並の状況。茎数は平年並の傾向。
○6月中旬田植は、9月上旬には出穂し、茎数は平年並～やや少ない傾向。
※気温が高く、日照はやや多いため、葉色がやや薄く草丈もやや低く推移しており、生育は現在の傾向が継続すると思われる。

適正な水管理

○高温が予想される時は、日中かけ流しや夜間入水を可能な限り実施する。
○出穂～開花期は、水が一番必要とされる時期なので、できるだけ水深を確保する。
○湛水状態は、根痛みを生じさせるので、差し水を行うなど細やかな灌水を心がける。
○水の確保が困難な場合には浅水とし、出穂後20日間は足跡水以上乾かさない。
※登熟期に水が不足すると白未熟粒や胴割粒の発生や籾の充実不足が助長されるため注意。
○台風などによる強風が予想される場合は深水湛水とし、通過後は直ちに一旦落水する。

落水の目安

○落水は、収穫作業に支障がない限りできるだけ遅らせ（収穫の5日前）、根や葉の活力を収穫直前まで維持させる。

3 病害虫について

いもち病の発生状況

○南予における、発生は地域差がみられるが平年並の状況。一部で穂いもちの発生が見られている。
○今後の気象予報によると気温は高く、降水量は平年並～やや多いため、発生は、停滞病斑が中心であり、現在の傾向が継続すると予想される。

紋枯病の発生状況

○県病害虫発生予察情報では、やや多の予報となっている。
○ほ場によっては、株元～中位に発生が認められており、今後の気象予報によると気温は高く、降水量は平年並～やや多いとされており、発生に助長的で、上位進展が危惧される場合は応急防除を実施。

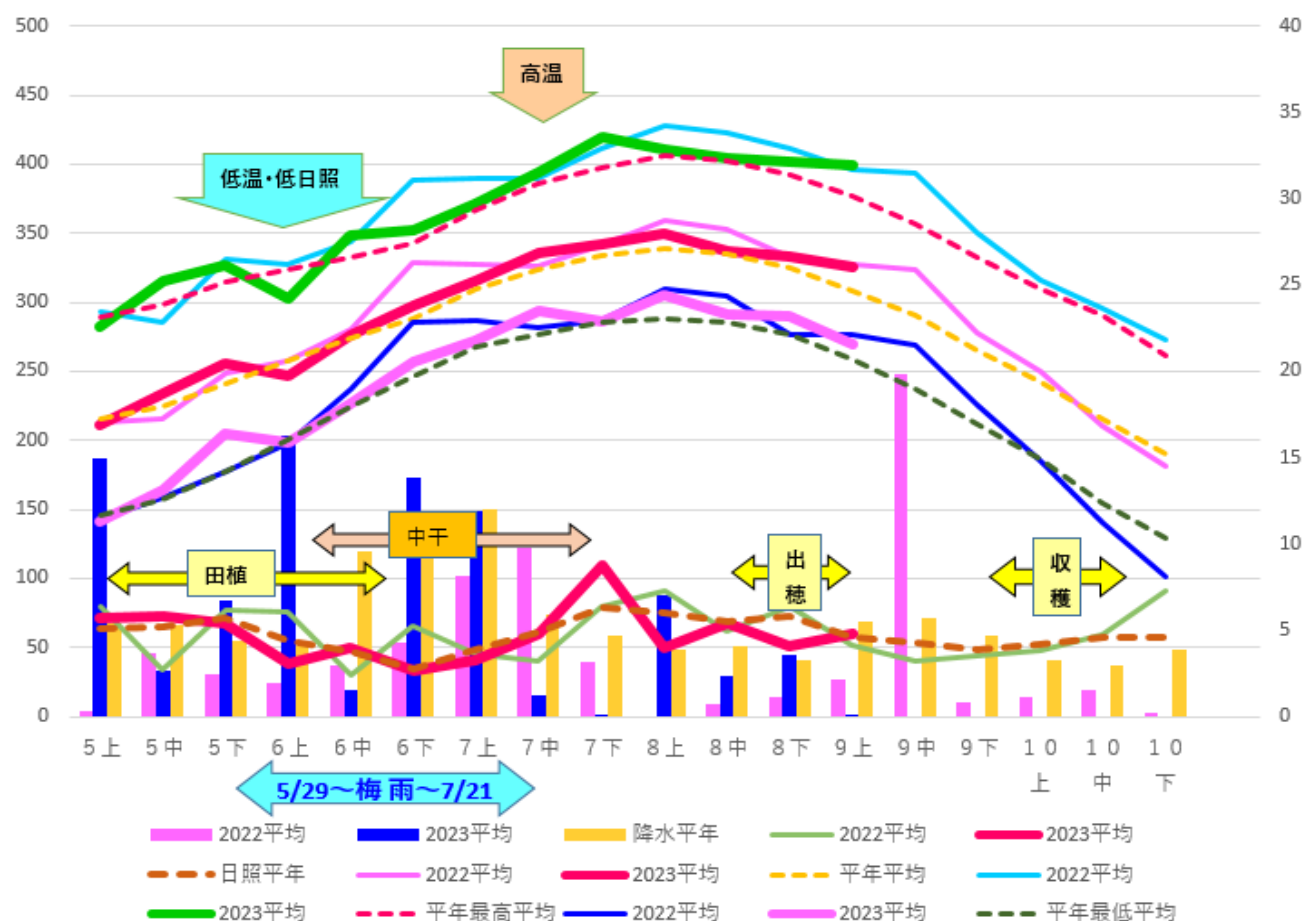
トビロウソウカの発生状況

○県病害虫発生予察情報では、並～やや少の予報となっている。
○後の気象予報によると気温は高いため発生には助長的であるが、現在のところ発生密度は低い。

斑点米カメムシ類

○県病害虫発生予察情報では、並～やや多の予報となっている。
○防除は、乳熟期～糊熟期（出穂後10～15日）を目安に実施。

気象状況（宇和）



高温対策

飽水管理を徹底するとともに地域の用水の供給状況に応じ、適切に水管理（かけ流し・湛水など）を実施できるように準備を進めておく。

フェーン現象対策 【参考】

フェーン現象に備えて、深水管理に！（5cm以上）

※急激な高温により脱水状態になり、白穂や胴割粒を助長。
 ※深水は水分補給だけでなく風揺れを低減。

○ 出穂期前後は最も水を必要とする時期。

→ 出穂時に土壤水分が維持されるよう水管理を徹底。

★ フェーン情報や台風情報等に注意し、湛水できるよう準備。

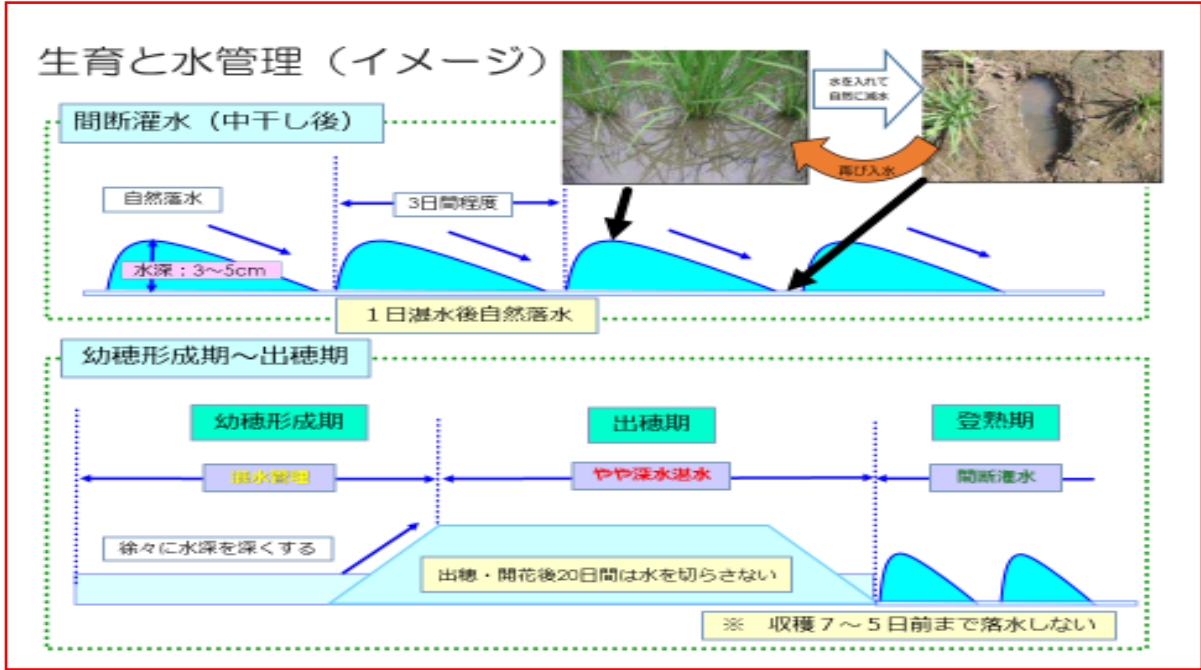
※ 出穂期 30日後までは飽水管理を徹底。

→ 可能な限り遅くまで土壤水分を保持のこと。

× 常時湛水や表面の土が白く乾くまで干さない。

★ 台風情報等に注意し、強風・フェーン現象等による高温・乾燥が予想される場合には、品質と収量の低下（白穂、白未熟粒、胴割れ）を軽減するため、早めの湛水に努めること。

★ フェーン現象や強風の日は終日深水管理とし、収まったら直ちに落水。

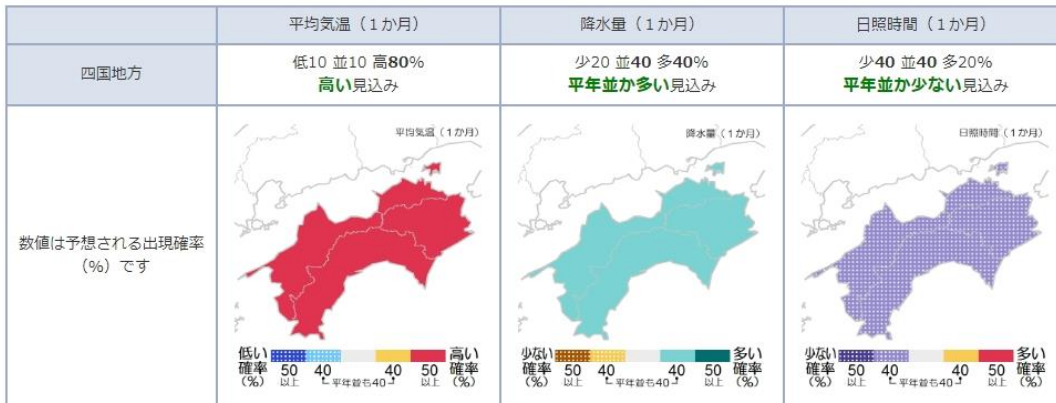


気象予報（1か月）

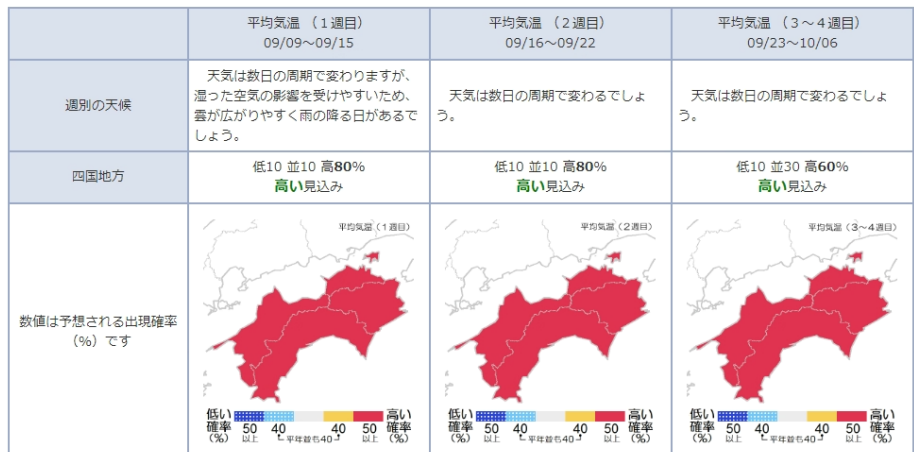
暖かい空気が流れ込みやすいため、向こう1か月の気温は高い

期間の前半は気温がかなり高くなる見込み。降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ない。

1か月の平均気温・降水量・日照時間



週別の平均気温と天候



水管理について（参考）

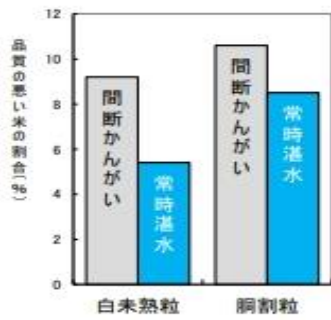


図1 出穂前後の水管理と白未熟粒、胴割粒との関係
(滋賀農振セ 2006年「コシヒカリ」)

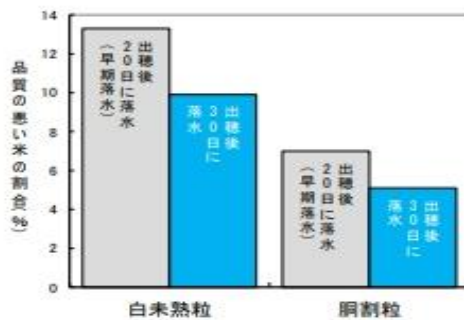
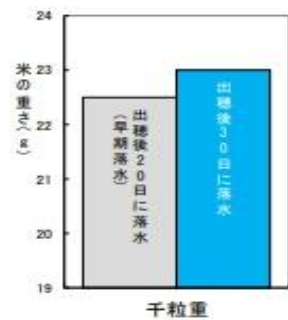


図2 落水時期と白未熟粒、胴割粒、千粒重(米の重さ)の関係
(滋賀農試湖北分場2004年「コシヒカリ」)

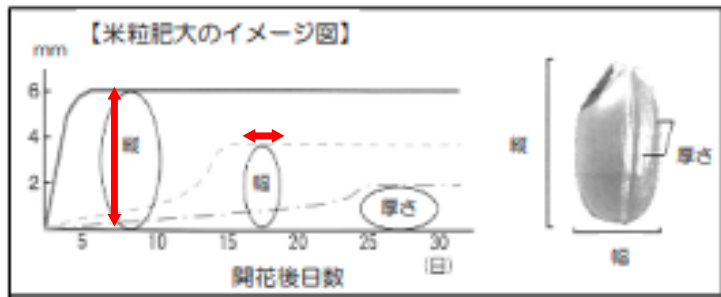


出穂前後の常時湛水で
白未熟粒、胴割粒が減ります

収穫直前まで入水すると、白未熟粒、
胴割粒が減り、収量も増加します

※玄米の発達について

玄米の発達は出穂開花後 25 日以降まで続きます。出穂期 25 日後までは飽水管理を継続することによって、土壌に適度な水分を保つことで窒素の発現を促して後期栄養を維持するとともに、白未熟粒の発生を抑えて整粒歩合を高めることができます。



東北農研センターH18 研究成果ダイジェストより

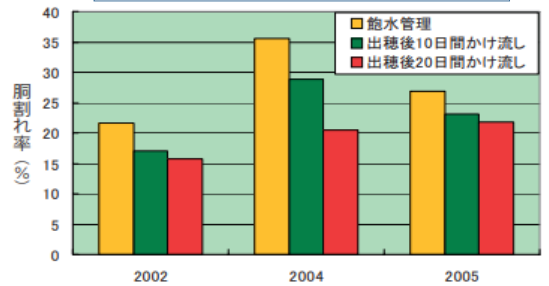


図3 登熟初期の水管理条件が胴割れ発生程度に及ぼす影響
(品種:あきたこまち)

図3のように、登熟初期にかけ流しの灌水を行うと胴割率が低くなる。
特に、出穂 10 日間の地温を下げることで軽減効果を高める。